



●断った革の表情、コバの美しさ、縫い目のラインや強度、すべてに細かなこだわりをこめた天神ワークスのプロダクツは、こうした職人のための道具、によって生み出される。ミドルウォレット3万2000円



↑上が目がひし形で角度の浅い日本流の「菱目」、中が角度がある目が線状の「ヨーロッパ目打ち」。穴の開け方で縫い目のかかり方や耐久性も変わってくるため、実は重要な部分なのだ。天神ワークスは両方のいいところ取りをしたオリジナルの目打ち（一番下）を特注で製作して使用



↑目打ちと言っても日本の革細工に使われてきた「菱目」やヨーロッパで馬具などに使われてきた「ヨーロッパ目」など種類がある。オーダーした職人が求める「目」と革を傷つけず切れ込み鋭さはこのヤスリがけひとつで生み出される

プロのメカニックはスナップオンなど一流の工具を選ぶ。それは毎日使うものとして手にしつくり馴染み、クライアントの大切なクルマのホルトを傷つけることがないからだ。モノを作る職人にとって、道具を選ぶ、ということは生み出すプロダクツのクオリティすら左右する大切なこと。

ここで作り出されるのは、目打ちや、ネン引き、革包丁など。どれもレザークラフトショップに行けば手に入るものだけれど、天神ワークスの職人、高木さんがこの店に通うのにはワケがある。ひとつはその精度と耐久性。目打ちひとつをとっても革にサクッと刺さり美しい目を開ける。これはこの後の縫製の出来も左右する。そして天神ワークスで使うような厚いレザーを断つ場合、その切り口が美しくなければ、レザーを重ねたときの面も狂ってきってしまう。こうした精度を維持しながら毎日使い続けることを考えると、岩田屋の道具以外は選べないのだという。

もうひとつは、道具の作り手に直接、要望を伝えられること。天神ワークスでは美しく強い縫い目にするため、目打ちは、和流の菱目とヨーロッパ目の中間といえる独自のものを用いている。こうしたオーダーで道具を作り出せるのも魅力なのだ、と天神ワークスの高木さんは語る。「高木くんのように、自分で革を断つ職人も最近は少なくなつたね」と笑いかける岩田さん。職人の使う道具は職人が作り出す。天神ワークスのこだわりの原点は、道具選びからすでに始まっているのだ。



●1000度を超え熱くなった鉄を、槌で叩くだけでも簡単に形にしてゆく。実際にはしっかりと芯を捉えて叩くだけでも熟練を要するという。鉄は叩かれることに不純物が火花を散らして飛び、強い鋼になる。職人の道具は職人が作り上げるのだ



↓昭和2年創業という岩田屋で、60年以上職人のための道具を作り続ける岩田直治さん。戦前は軍靴、戦後はカメラケースなどに使われる革の抜き型や目打ちを一筋に作り続けてきた職人である。近年はレザークラフトを始める人が増え、目打ちの注文が増えているという



道具がらじまる。よいモノづくりは

天神ワークスのレザークラフトへのこだわり。 THE BEGINNING

プロフェッショナルは道具にこだわる。それは単なる作業のしやすさだけでなく、モノを作る、というプロセスに関わる職人にとっては、プロダクツのクオリティをも左右するモノなのだ……。

text/A.Takeuchi 竹内淳 photo/Y.Nomoto 野元裕司
問い合わせ/天神ワークス
TEL03-3870-8658 www.tenjinworks.com

↓右から目打ちが完成する順を追ったもの。すべて手作業で鋼を道具に仕立てる。革に縫い目の穴を開ける道具と言ってもしまえばそれまでだが、レザークラフト用として流通する他の目打ちとは、貫通する鋭さや、耐久性がまったく違うという。毎日使うものだからこそ、の選択だ



←ちなみにカバンなど数多く作られるものはこうした抜き型を使うのが主流。岩田屋さんも本来はこの製作が本業なので興味のある業者の方は問い合わせを。もちろん目打ちのオーダーも受け付けてくれる。(岩田屋工具店 TEL03-3872-0325 www.tctv.ne.jp/iwataya)

又メ革の色合いや革の良し悪しだけではない、天神ワークスの新たなこだわりを知った今、あなたがチェックする部分はいつもと違っはす。穴の開くほど見つめてみたい。

新たなこだわりを知れば、 目が行く部分も違っはす。



ロングウォレット

LW05TN

金属パーツを一切使わず、高い耐久性と革本来の経年変化を楽しめるモデル。シンプルなデザインは使い込むと尚ステッチやシルエットが美しく際立つようデザインされている。95×192×25ミリ オリジナルサドルレザー 3万5000円



↑カードを独立して9箇所に収納できる作り。何かとカードの多いご時世では使い勝手がいい。



真鍮のルーブとキボシをアクセントに加えたLW03BKは3万6000円とSW01TNのモデルもタンとブラックの2色展開



↑札入れの部分はマチがついているのでお札を取り出しやすく振る舞いもスマートになる



ミドルウォレット

MW02TN

3ミリ厚のオリジナルサドルレザーのベンスのみを使用。タンニンを多く含んだ革はコシがあり使い込むと深いアメ色に。シンプルで男女を問わず使いやすいサイズが魅力。95×148×25ミリ 3万2000円

真鍮のアクセントを加えたMW04BKは3万3000円。堅牢で柔軟な革の味わいを楽しめる



↑シンプルで温かみのある曲線でデザインしたSW01TNは2万6000円。ブラックもある

↑サイフを開くと自然に札入れのポケットが開く構造で使いやすい。カード入れは9箇所



↑厚みのある革を張り合わせしっかりとコバを磨きこんである。縫製もみるほどに美しいフチャコバを作るのに欠かせない。



革包丁

革は場所によってシボが強かったり傷があったりと様々。革の繊維を見きわめて型をとる位置を決め、垂直に断つ。こうした心づかいひとつで作品のクオリティが変わってしまうのだ。型抜きも革の端がつぶれてしまつため用いず、手断ち一本にこだわっている。



ネン引き

目打ちを行う際にガイドとなるネン引き。溝を掘る方法もあるが、銀面を削ると後の耐久性にも影響が出ることから、この手法にこだわり丁寧な角度もガイドを引き溝を沈ませる。時間はかかるが、銀面を傷つけず縫製の際に縫い糸を食いこませて耐久性を保つ。



目打ち

日本流の愛目は耐久性が高く縫い目がまつくのが特徴。ヨーロッパ目は角度のついた縫い目になる。天神ワークスは愛目で50度の角度がついたオリジナルを使い、美しく強い縫い目を作り出している。また厚手の革にも使えるよう刃が長くなたっているのも特徴だ。

こだわりの道具を使うからできる、 天神ワークスのひと手間。

こだわりの道具を用いることで、いったいどんなこだわりをカタチにしているのか。実例を見てそのクオリティを実感したい。



まめカンナ

エッジを落としてバリを取る面取りに使う道具。彫刻刀のように押して削る面取りの道具もあるが、カンナは引く調節することで、刃の出方を調節することで、強さや、深い浅いなど削りの細やかな加減をすることが可能になる。美しいフチャコバを作るのに欠かせない。



角落とし・小判型ポンチ

ベルトの端など包丁で切らない3ミリ以上の厚い革を美しいRで断つ道具。ポンチとも叩いて使うため、切れ味がよく耐久性がないと断ち切れなかつた革の繊維がポンポンと残ってしまう。岩田屋のものは刃こぼれしたことがないという。



菱キリ

本来は目打ちした穴をしっかりと開ける縫いの作業で使う道具だが、革を張り合わせる時に銀面を削つてのりしろを作るのにも使っている。しっかりと接着することで、縫い合わせているときにズレてきたりということがなく、完成度を左右するのだという。